



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

# 日本の文学

23

谷崎潤一郎 (一)

中央公論社

谷崎潤一郎 (一)

昭和39年2月5日初版発行

昭和49年4月30日<sup>37</sup>版発行

発行者 高 梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 株式会社トープロ  
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂  
口絵写真印刷 株式会社トープロ  
本文用紙 本州製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 有限会社美濃羽製函所  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34



ふるさと——浜町三丁目の河岸にて

昭和33年4月 撮影 浜谷 浩

目次

刺青

5

少年

12

小さな王国

45

母を恋うる記

70

蓼喰う虫

90

春琴抄

236

猫と庄造と二人のおんな

282

少将滋幹の母

358

雪後庵夜話

465

年 解 注  
譜 説 解

挿 口  
画 絵

円  
地  
文  
子

555 540 526

「少年」

錦木清方

「少年」

錦木清方

「夢喰う虫」

小出櫓重

「春琴抄」

和田三造

「猫と庄造と一人のおんな」

安井曾太郎

「少将滋幹の母」

小倉遊亀

谷崎潤一郎  
(一)





## 刺青

それはまだ人々が「愚」と云う貴い徳を持つていて、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であつた。

殿様や若旦那の長閑な顔が曇らぬように、御殿女中や華魁の笑いの種が尽きぬようにと、饒舌を売るお茶坊主達の翫間だのと云う職業が、立派に存在して行けたほど、世間がのんびりしていた時分であつた。女定九郎、女自雷也、女鳴神、——当時の芝居でも草雙紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。誰も彼も挙つて美しからんと努めた揚句は、天稟の体へ絵の具を注ぎ込むまでになつた。芳烈な、或は絢爛な、線と色とがその頃の人々の肌に躍つた。

馬道を通うお客は、見事な刺青のある鴛籠舁を選んで乗つた。吉原、辰巳の女も美しい刺青の男に惚れた。博徒、鳶の者はもとより、町人から稀には侍なども入墨を

した。時々兩國で催される刺青会では参会者おのおの肌を叩いて、互に奇抜な意匠を誇り合い、評しあつた。

清吉と云う若い刺青師の腕ききがあつた。浅草のちやり文、松島町の奴平、こんこん次郎などにも劣らぬ名手であるとして囃されて、何十人の人の肌は、彼の絵筆の下に統地となつて拵げられた。刺青会で好評を博す刺青の多くは彼の手になつたものであつた。達磨金はばかし刺が得意と云われ、唐草権太は朱刺の名手と讃えられ、清吉は又奇警な構図と妖艶な線とで名を知られた。

もと豊国貞の風を慕つて、浮世絵師の渡世をしていただけに、刺青師に墮落してからの清吉にもさすが画工らしい良心と、鋭感とが残つていた。彼の心を惹きつけるほどの皮膚と骨組みとを持つ人でなければ、彼の刺青を購う訳には行かなかつた。たまたま描いて貰えるとしても、一切の構図と費用とを彼の望むがままにして、その上堪え難い針先の苦痛を、一と月も二た月もこらえねばならなかつた。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快楽と宿願とが潜んでいた。彼が人々の肌を針で突き刺す時、真紅に血を含んで脹れ上る肉の疼きに堪えかねて、大抵の男は苦しき呻き声を発したが、その呻きごえが激しければ激しい

ほど、彼は不思議に云い難き愉快を感じるのであった。

刺青のうちでも殊に痛いと言われる朱刺、ぼかしぼり、

——それをを用いることを彼は殊更喜んだ。一日平均五六百本の針に刺されて、色上げを良くするため湯へ浴つて出て来る人は、皆半死半生の体で清吉の足下に打ち倒れたまま、暫くは身動きさえも出来なかった。その無残な姿をいつも清吉は冷やかに眺めて、

「嗚お痛みでがしようなあ」

と云いながら、快さそうに笑っている。

意気地のない男などが、まるで知死期の苦しみのように口を歪め歯を喰いしぼり、ひい／＼と悲鳴をあげることがあると、彼は、

「お前さんも江戸っ児だ。辛抱しなさい。——この清吉の針は飛び切りに痛えのだから」

こう云って、涙にうるむ男の顔を横目で見ながら、かまわず刺つて行った。また我慢づよい者がグッと胆を据えて、眉一つしかめず休えていると、

「ふむ、お前さんは見掛けによらねえ突つ張者だ。——

——だが見なさい、今にそろそろ疼き出して、どうにもこうにもたまらないようになろうから」

と、白い歯を見せて笑った。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込むことであった。その女の素質と容貌とについては、いろいろの注文があった。唇に美しい顔、美しい肌とのみでは、彼はなかなか満足することが出来なかった。江戸中の色町に名を響かせた女と云う女を調べても、彼の氣分に適った味わいと調子とは容易に見つからなかった。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく憶れながらも、彼はなおその願いを捨てずにいた。

ちょうど四年目の夏のとあるゆうべ、深川の料理屋平清の前を通りかかった時、彼はふと門口に待っている駕籠の簾のかげから真つ白な女の素足のこぼれているのに氣がついた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顔と同じように複雑な表情を持って映った。その女の足は、彼に取つては貴き肉の宝玉であった。拇指から起つて小指に終る繊細な五本の指の整い方、絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合い、珠のような踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗うかと疑われる皮膚の潤沢。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを蹈みつける足であった。この足を持つ女こ

そは、彼が永年たずねあぐんだ、女の中の女であらうと思われた。清吉は躍りたつ胸をおさえて、その人の顔が見たさに駕籠の後を追いかけたが、二三町行くと、もうその影は見えなかった。

清吉の憧れごちが、激しき恋に変わつてその年も暮れ、五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝であつた。彼は深川佐賀町の寓居で、房楊枝をくわえながら、錆竹の濡れ縁に万年青の鉢を眺めていると、庭の裏木戸を訪うけはいがして、袖垣のかげから、ついぞ見馴れぬ小娘がはいつて来た。

それは清吉が馴染の辰巳の藝妓から寄こされた使の者であつた。

「姐さんからこの羽織を親方へお手渡しして、何か裏地へ絵模様を画いて下さるようにお頼み申せて……」と、娘は鬱金の風呂敷をほだいて、中から岩井杜若の似顔画のたとうに包まれた女羽織と、一通の手紙とを取り出した。

その手紙には羽織のことをくれぐれも頼んだ末に、使の娘は近々に私の妹分として御座敷へ出る筈故、私のことも忘れずにこの娘も引き立ててやって下さいと認めてあつた。

「どうも見覚えのない顔だと思つたが、それじゃお前はどの頃こつちへ来なすつたのか」

こう云つて清吉は、しげしげと娘の姿を見守つた。年頃は漸う十六か七かと思われたが、その娘の顔は、不思議にも長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂をも弄んだ年増のように物凄く整つていた。それは国中の罪と財との流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代つたため麗しい多くの男女の、夢の数々から生れ出すべき器量であつた。

「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で帰つたことがあろうがな」

こう訊ねながら、清吉は娘を縁へかけさせて、備後表の台に乗つた巧緻な素足を仔細に眺めた。

「えゝ、あの時分なら、まだお父さんが生きていたから平清へもたびたびまいりましたのさ」

と、娘は奇妙な質問に笑つて答えた。

「ちようどこれで足かけ五年、己はお前を待つていた。

顔を見るのは始めてだが、お前の足にはおぼえがある。

——お前に見せてやりたいものがあるから、上つてゆつくり遊んで行くがいい」

と、清吉は暇を告げて帰ろうとする娘の手を取つて、大

川の水に臨む二階座敷へ案内した後、巻物を二本とり出して、まずその一つを娘の前に繰り展げた。

それは古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵であった。瑠璃珊瑚を鑲めた金冠の重さに得堪えぬなやかな体を、ぐつたり勾欄に靠れて、羅綾の裳裾を階の中段にひるがえし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めている妃の風情と云い、鉄の鎖で四肢を銅柱へ縛いつけられ、最後の運命を待ち構えつつ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云い、物凄いまでに巧に描かれていた。

娘は暫くこの奇怪な絵の面を見入っていたが、知らず識らずその瞳は輝きその唇は顫えた。怪しくもその顔はだんだんと妃の顔に似通つて来た。娘はそこに隠れたる真の「己」を見出した。

「この絵にはお前の心が映っているぞ」

こう云つて、清吉は快げに笑いながら、娘の顔をのぞき込んだ。

「どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せなさるのです」

と、娘は青褪めた顔を擡げて云った。

「この絵の女はお前なのだ。この女の血がお前の体に交

っている筈だ」

と、彼は更に他の一本の画幅を展げた。

それは「肥料」と云う画題であつた。画面の中央に、若い女が桜の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃れている多くの男たちの屍骸を見つめている。女の身邊を舞いつつ凱歌をうたう小鳥の群、女の瞳に溢れたる抑え難き誇りと歓びの色。それは戦の跡の景色か、花園の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潜んでいた何物かを、探りあてたる心地であつた。

「これはお前の未来を絵に現わしたのだ。ここに斃れている人たちは、皆これからお前のために命を捨てるのだ」

こう云つて、清吉は娘の顔と寸分違わぬ画面の女を指さした。

「後生だから、早くその絵をしまつて下さい」

と、娘は誘惑を避けるが如く、画面に背いて畳の上へ突俯したが、やがて再び唇をわななかしした。

「親方、白状します。私はお前さんのお察し通り、その絵の女のような性分を持っていますのさ。——だから

もう堪忍して、それを引つ込めておくんなさい」

「そんな卑怯なことを云わずと、もっとよくこの絵を見

るがいい。それを恐ろしがるのも、まあ今のうちだろうよ」

こう云った清吉の顔には、いつもの意地の悪い笑いが漂っていた。

しかし娘の頭は容易に上らなかつた。襦袢の袖に顔を蔽うていつまでも突俯したまま、

「親方、どうか私を帰しておくれ。お前さんの側にいるのは恐ろしいから」

と、幾度か繰り返した。

「まあ待ちなさい。己がお前を立派な器量の女にしてやるから」

と云いながら清吉は何気なく娘の側に近寄つた。彼の懐には嘗て和蘭医から貰つた麻睡剤の壺が忍ばせてあつた。

日はうららかに川面を射て、八畳の座敷は燃えるように照つた。水面から反射する光線が、無心に眠る娘の顔や、障子の紙に金色の波紋を描いてふるえていた。部屋のはしきりを閉て切つて刺青の道具を手にした清吉は、暫くは唯恍惚としてすわっているばかりであつた。彼は今始めて女の妙相をしみじみ味わうことが出来た。その動

かぬ顔に相對して、十年百年この一室に靜坐するともなれ飽くことを知るまいと思われた。古のメム\*フィスの民が、莊嚴なる埃及の天地を、ピラミッドとスフィンクスとで飾つたように、清吉は清淨な人間の皮膚を、自分の恋で彩ろうとするのであつた。

やがて彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ絵筆の穂を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行つた。若い刺青師の靈は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲んだ。焼酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴々々は、彼の命のしたたりであつた。彼はそこに我が魂の色を見た。いつしか午も過ぎて、のどかな春の日は漸く暮れかかつたが、清吉の手は少しも休まず、女の眠りも破れなかつた。娘の帰りの遅きを案じて迎ひに出た箱屋までが、「あの娘ならもう疾うに帰つて行きましたよ」

と云われて追い返された。月が対岸の土州屋敷の上にかかつて、夢のような光が沿岸一帯の家々の座敷に流れ込む頃には、刺青はまだ半分も出来上らず、清吉は一心に蠟燭の心を掻き立てていた。

一点の色を注ぎ込むのも、彼に取つては容易な業でなかつた。さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるように感じた。針の痕は次第々々に巨

大な女郎蜘蛛の形象を具え始めて、再び夜がしらしらと白み初めた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢を伸ばしつゝ、背一面に蟠った。

春の夜は、上り下りの河船の櫓声に明け放れて、朝風を孕んで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、中洲、箱崎、靈岸島の家々の薨がきらめく頃、清吉は漸く絵筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めていた。その刺青こそは彼が生命のすべてであつた。その仕事をなし終えた後の彼の心は空虚であつた。

二つの人影はそのまま稍と暫く動かなかつた。そうして、低く、かすれた声が部屋の上壁にふるえて聞えた。

「己はお前をほんとうの美しい女にするために、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ、もう今からは日本国中に、お前に優る女はいない。お前はもう今までのような臆病な心は持っていないのだ。男と云う男は、皆なお前の肥料になるのだ。……」

その言葉が通じたか、かすかに、糸のような呻き声が女の唇にのぼつた。娘は次第々に知覚を恢復して来た。重く引き入れては、重く引き出す肩息に、蜘蛛の肢は生けるが如く蠕動した。

「苦しかろう。体を蜘蛛が抱きしめているのだから」

こう云われて娘は細く無意味な眼を開いた。その瞳は夕月の光を増すように、だんだんと輝いて男の顔に照つた。

「親方、早く私に背の刺青を見せておくれ、お前さんの命を貰った代りに、私は嘸美しくなつたらうねえ」

娘の言葉は夢のようであつたが、しかしその調子にはどこか鋭い力がこもっていた。

「まあ、これから湯殿へ行つて色上げをするのだ。苦しからうがちつと我慢をしな」

と、清吉は耳元へ口を寄せて、労わるように囁いた。

「美しくさえるのなら、どんなにでも辛抱して見せましょうよ」

と、娘は身内の痛みを抑えて、強いて微笑んだ。

「あゝ、湯が滲みて苦しいこと。……親方、後生だから私を打つ捨て、二階へ行つて待つていておくれ、私はこんな悲惨な態を男に見られるのが口惜しいから」

娘は湯上りの体を拭いもあえず、いたわる清吉の手をつきのけて、激しい苦痛に流しの板の間へ身を投げたまゝ、魔される如くに呻いた。気狂じみた髪が悩ましげにその頬へ乱れた。女の背後には鏡台が立てかけてあつた。

真つ白な足の裏が二つ、その面へ映っていた。

昨日とは打って変った女の態度に、清吉は「と方ならず驚いたが、云われるままに独り二階に待っていると、凡そ半時ばかり経って、女は洗髪を両肩へすべらせ、身じまいを整えて上つて来た。そうして苦痛のかけもとまらぬ晴れやかな眉を張って、欄干に靠れながらおぼろにかすむ大空を仰いだ。

「この絵は刺青と一緒に前にお前にやるから、それを持ってもう帰るがいい」

こう云って清吉は巻物を女の前さし置いた。

「親方、私はもう今までのような臆病な心を、さらりと捨ててしまいました。——お前さんは真先に私の肥料になつたんだねえ」

と、女は剣のような瞳を輝かした。その耳には凱歌の聲がひびいていた。

「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はこう云った。

女は黙って領いて肌を脱いだ。折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。

## 少年

もうかれこれ二十年ばかりも前になろう。漸く私が十ぐらいいで、蠣殻町二丁目の家から水天宮裏の有馬学校へ通っていた時分——人形町通りの空が霞んで、軒並の商家の紺暖簾にぼかぼかと日があたって、取り止めのない夢のような幼心にも何となく春が感じられる陽気な時候の頃であつた。

或るうらうらと晴れた日のこと、眠くなるような午後の授業が済んで墨だらけの手に算盤を抱えながら学校の門を出ようとすると、

「萩原の栄ちゃん」

と、私の名を呼んで後からばた／＼と追いかけて来た者がある。その子は同級の塙信一と云って入学した当時から尋常四年の今日まで附添人の女中を片時も側から離れたことのない評判の意気地なし、誰も彼も弱虫だの泣き

虫だのと悪口をきいて遊び相手になる者のない坊ちゃんであつた。

「何か用かい」

珍らしくも信一から声をかけられたのを不思議に思つ

て私はその子と附添の女中の顔をしげしげと見守つた。

「今日あたしの家へ来て一緒に遊びな。家のお庭でお稲荷様のお祭があるんだから」

緋の打ち紐で括つたような口から、優しい、おずおずした声で云つて、信一は訴えるような眼差をした。いつも一人ぼっちでいじけている子が、何でこんな意外なことを云うのやら、私は少しうろたえて、相手の顔を読むようにぼんやり立ったままであつたが、日頃は弱虫だの何だのと悪口を云つていじめ散らしたようなものの、こゝういつて眼の前に置いて見ると、さすが良家の子息だけに気高く美しい所があるように思われた。糸織の筒袖に博多の献上の帯を締め、黄八丈の羽織を着てきやらの白足袋に雪駄を穿いた様子が、色の白い瓜実顔の面立とよく似合つて、今更品位に打たれたように、私はうっとりとしてしまった。

「ねえ、萩原の坊ちゃん、家の坊ちゃんと御一緒にお遊びなさいましな。実は今日手前共にお祭がございまして





ね、あのなるべく大人おとなしいお可愛らしいお友達を誘って  
お連れ申すようにお母様のお云い附けがあったものです  
から、それで坊ちゃんあなたがあなたをお誘いなさるのでござ  
いますよ。ね、いらして下さいましな。それともお嫌  
でございすか」

附添の女中にこう云われて、私は心中得意になったが、  
「そんなら一旦家うちへ帰って、断ことわってから遊びに行こう」  
と、わざと殊勝しよしょうらしい答をした。

「おやそうでございましたね。ではあなたのお家うちまでお  
供して参って、お母様に私からお願ひ致しますようか、  
そうして手前共へ御一緒に参りましょう」

「うん、いいよ。お前まへン所は知しっているから後から一人  
でも行けるよ」

「そうでございすか。それではきつとお待ち申します  
よ。お歸りには私がお宅までお送り申しますから、お心  
配なさらぬようにお家へ断ことわっていらつしやいまし」

「あゝ、それじゃさよなら」

こう云って、私は子供の方を向いてなつかしそうに挨拶  
をしたが、信一は例の品のある顔をにこりともさせず、  
唯鷹揚お鷹ようにうなずいただけであった。

今日からあの立派な子供と仲好しになるのかと思うと、